

Learnability of net games in middle grades of primary school.

1K09B177-1 澁田 彩香

指導教員 主査 吉永 武史先生 副査 宮崎 正己先生

【研究の目的】

2008（平成 20）年に改訂された新しい学習指導要領では、小学校中学年以降のゲームならびにボール運動領域がゴール型、ネット型、ベースボール型という 3 つの類型で示された。新学習指導要領では、中学年におけるネット型ゲームの学習内容は明確にされたが、授業実践の少なさにより、具体的な学習指導のあり方については不明瞭なままである。そのため、中学年の学習内容とされる「ラリーの続くゲームをする」や「相手が捕りにくいようなボールを返す」といった技能操作に関する内容の習得が難しい状況にあるといえる。その理由として、小学校中学年の児童にとって用具を操作したり、連携プレイを行ったりすることは技能発達段階の観点から難しいと考えられるからである。今日、小学校中学年のネット型ゲームの授業では、ソフトバレーボールやプレルボールがしばしば教材として用いられているが、これらのゲームは「連携プレイ型」であるため、「攻守一体プレイ型」よりも難易度が高いと予想される。ボールの落下点へ移動する、打つ・弾くなどのボール操作技能を身につけること、さらには意図的にボールを打つ方向を決めるなどのネット型ゲームの技能に関する学習内容の習得を考えると、難易度の高いと考えられる連携プレイ型のソフトバレーボールやプレルボールだけでなく、攻守一体プレイ型の「ハンドテニス」を教材として取り入れることも中学年段階におけるネット型ゲームの学習可能性の幅を広げることになるのではないかと考える。

そこで本研究では、小学校中学年段階におけるネット型ゲームの学習可能性について検討することを目的とする。具体的には、小学校中学年を対象にして行われたハンドテニスとソフトバレーボールのゲームパフォーマンスを分析することで、それぞれの学習可能性を明らかにする。

【研究の方法】

まず最初に攻守一体プレイ型のハンドテニスの学習可能性を検討するために、関東圏内 A 小学校の 4 年生

を対象としたハンドテニスのゲーム（2 対 2）を撮影し、児童のパフォーマンスを分析する。次に、連携プレイ型との比較検討を行うために、同じく関東圏内 B 小学校の 4 年生を対象とした、ソフトバレーボールのゲーム（3 対 3）を撮影し、分析を行う。いずれもコート斜め上方のからデジタルビデオカメラで撮影し、収集した映像データをもとに、①返球率、②平均ラリー回数、③得点プレイの傾向を算出した。

【結果】

返球率についてはハンドテニスが 53.3%、ソフトバレーボールの単元始めが 44.0%、ソフトバレーボールの単元終わりが 62.3%であった。平均ラリー回数は、ハンドテニスが 1.1 回、ソフトバレーボールの単元始めが 0.8 回、ソフトバレーボールの単元終わりが 1.7 回であった。また、得点プレイの傾向からもソフトバレーボールの単元終わりが最も戦術的な攻撃が展開できていることが確認された。小学校中学年では一定の学習経験を得ることによって、攻守一体プレイ型のハンドテニスよりも連携プレイ型のソフトバレーボールのほうが、ラリーの続くゲームを児童に保証できる可能性が高いという示唆が得られた。但し、その条件として、ドリルゲームやタスクゲームなどの単元教材を児童の実態に合わせて提供することがあげられ、そのことが「ラリーを続けるゲーム」ができるようになることにつながっていくといえる。

【今後の課題】

ハンドテニスについては、ゲームのルールをさらに工夫し、ネット型ゲームの魅力であるラリーを続ける攻防が出現しやすい手立てを検討する必要がある。ソフトバレーボールについては、キャッチなしのソフトバレーボールのパフォーマンスは未検証のままである。小学校中学年におけるネット型ゲームは、新しい学習指導要領が施行されて間もないため実践例も決して多くない。今後は、安定した学習成果が得られるような学習指導過程についてのさらなる実証的な研究が求められるといえよう。